

愛される広場と少女の像

森記念財団研究員
脇本敬治

人もまばらな朝の空気のなか、箒の音が石畳の広場に響く。ご近所の人々がほぼ毎朝、ゴミや落ち葉をきれいに掃除している広場の名前は、パティオ十番。東京の中心部、港区麻布十番の街の中にある。

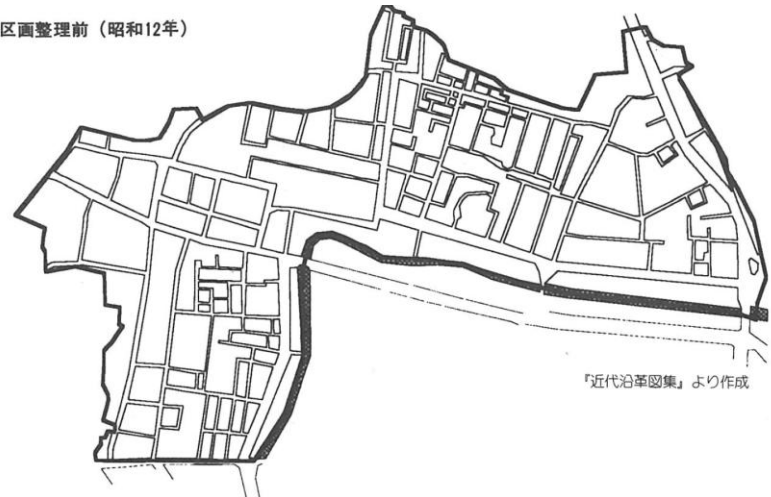
この街の歴史は古く、十番の地名は江戸時代の前期、1675年に幕府が古川の改修工事を行ったことに由来する。麻布十番は関東大震災の延焼を免れたため、昭和の初めに商店街として非常に繁盛したが、1945年アメリカ軍による東京大空襲のため街の全てが焼き尽くされてしまった。

戦後に周囲一帯は区画整理され、商店街の通りの脇には六本木に向かう大通りが通され、今は子供達の格好の遊び場になっている網代公園も造られた。江戸時代からの商店が少なからずあった街は、多くの人々が集まり住んでいたが、一方で車が通る十分な広さの道路や公園が不足していたのである。

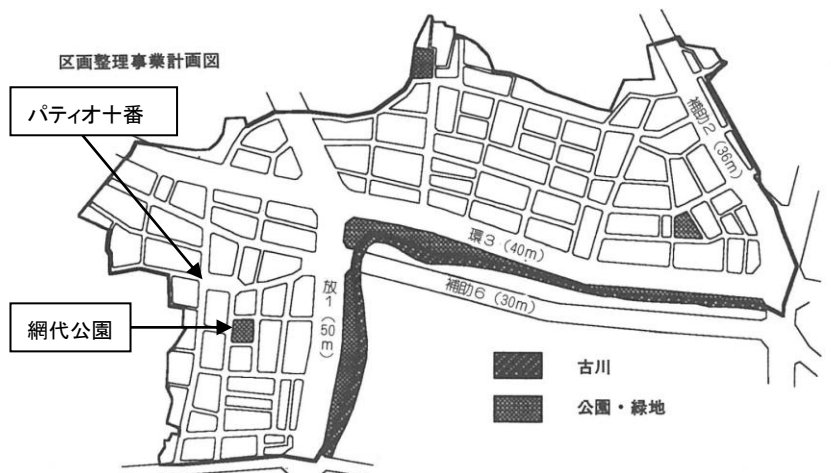
多くの人々が暮らしていたため、区画整理は難航した。新たな道路の位置や敷地の決定に時間がかかり、既に建てられた住宅もあったので曳家して移動する必要もあった。パティオ十番の地は将来を見越して新たに通された道路で、区画整理後は4車線の広い道路となり、車がよく止められていた。

麻布十番商店街は東京都のモデル商店街の指定を受け、1986年に広がった車道の中に、島のような広場が造られた。広場にはケヤキが植えられ、晩春から秋にかけて街の中に樹の緑が爽やかに映えるようになった。

区画整理前（昭和12年）



区画整理事業計画図



麻布十番・東麻布(上図:戦前、下図:戦後の区画整理事業計画図)

出所:森記念財団『古川物語』

1989年にはパティオの片隅に小さな女の子の像が置かれ、像の名前は「きみちゃん」とされた。きみちゃんは野口雨情の童謡「赤い靴」のモデルになった少女である。歌では女の子は横浜から汽船に乗って行ってしまったとされているが、実際には病のため日本を離れることなく、麻布十番にあった孤児院に預けられそこで短い生涯を終えていたという説をもとに、麻布十番商店街が母と子の愛の絆のシンボルとなるものを置きたいということで出来上った。日本人の誰もが一度は歌ったことがある、哀愁を帯びた旋律の童謡「赤い靴」。そのモデルの少女がひっそりと麻布で亡くなっていたという話は、バブル景気で沸き立っていた東京の中で聞く人の心に郷愁を掻き立てるものだった。

きみちゃんの像の向かいで商売をされていた山本^{きみとし}仁壽さんによると、完成した日の夕方、小さな像の足元に18円が置かれていたという。翌日も、その翌日も、わずかであるが、お金が置かれることが続いたため、山本さんは小さな貯金箱を設け、預かったお金は恵まれない子供のために全てユニセフに寄贈するようになった。このチャリティーは像が完成した年から毎年続き、2014年には四半世紀の累計額が1274万円となっている。また集まった浄財は阪神大震災、スマトラ沖地震、東日本大震災の際には義援金としても送られた。

寒い天气の続いた今年の寒中には、きみちゃんの像にあったかようなファーのマフラーがかけられていた。山本さんによると、これまでも寒い冬の日にはマフラーが着せられたり、夏には帽子がかぶせられたりすることがあったという。寒い日、暑い日にかかわらず、小さな像の前に佇み、熱心に足元の由来を読む人の姿は、麻布十番に欠かせないものとなっている。マフラー姿のきみちゃんは、見る人の心を少し温かくしたかもしれない。



工事中のパティオ十番(1986年 山本仁壽)



現在のパティオ十番、毎月第一土曜日に骨董市が開かれている



「きみちゃん」の像 由来を記すプレートがはめ込まれている

パティオ十番は街中の一息つける貴重な空間として、子供たちの遊び場になったり、また多くの人出がある麻布十番納涼祭りの会場や、催し物が開催されたりする広場である。一方でそこは、きみちゃんの像を通じてご近所の人と行き交う人の善意と優しい心が重なる広場でもある。麻布十番を訪れた際は、パティオ十番ときみちゃんの像にも足を伸ばしてみてもいいだろうか。



ファー姿がかわいいきみちゃん(2015年1月)
(山本仁寿)



マフラー姿のきみちゃん(2007年2月)
(山本仁寿)